

21 卵管の発見者、ガブリエーレ・

ファロツピオについて

藤田尚男

少し前の時代の学生は、卵管のことを「ファロツピウス管」と呼ぶことを習った。

「ファロツピオ」はイタリア語、「ファロツピウス」はラテン語、彼の名のスペルは、IとPの数が一定でなく、私の知るだけで六種類もある。当時は、スペルが統一されていなかったであろう。

北イタリアのパドヴァ大学には、一五九四年に造られた、世界に現存する中で最も古い解剖示説室がある。ガブリエーレ・ファロツピオ (Gabriele Falloppio) は、これを造ったジロラモ・ファブリツィオの師である。

当時のパドヴァは、ボローニアと並んで世界の解剖学のメッカであった。私は、現在の解剖学教室の建物の前を走る「ガブリエーレ・ファロツピオ通り (Via Gabriele

Falloppio)」を経て、聖アントニオ寺院を訪ねた。ここに「ファロツピオ夫妻の墓」がある。

彼は一五二三年にモデナに生まれ、ニッコロ・マシエラに学ぶ。一五四八年にフェラーラに移り、薬学の講義と人体解剖に従事する。一五四九年にピサの外科学と解剖学の教授になり、一五五一年にパドヴァに移り、一五六二年に三十九歳で亡くなるまで外科学と解剖学の教授と、植物園長を兼ねた。そのために「ファロツピオ通り」の道しるべには、名前の下に「解剖学者、植物学者、外科学者」と書かれてある。

彼の前任は、一年でパドヴァを去ったレアルド・コロンボであり、さらにその前任が近世解剖の祖、「ファブリカ」の著者、アンドレアス・ヴェサリウスであった。

若くして他界した彼の解剖学の主著は、死の一年前、一五六二年に出た「解剖学観察 (Observationes Anatomicae)」だけだった。ヴェネチアで出版されたオリジナルは、縦十五糎、横十糎の小型で、二二三頁(左右あわせて一頁になっているために実際はこの倍)からなり、図はまったくくない。一五四三年のヴェサリウスのファブリ

カが縦五十種、横三十種、豊富な図を併せて七百頁の大著であるのと対照的である。それにもかかわらず、「解剖学観察」は、「フアブリカ」に沿って観察し多くの誤りを正し、綿密な新知見と見解を記しているので評価が高い。その序文に詳細な解剖図譜を出版する計画が述べられているが、早逝したために果たせなかった。結核だったという。

フアロツピオがパドヴァに來たのは、ヴェサリウスが去った後であり、一緒に研究室にいたことはないが、「自らの手で解剖し自身の眼で詳細に観察する」ことの大切さを学び、フアブリカから得た多くの知識を下敷にして新知見を発見していったことや、ヴェサリウスが彼を高く評価していることなどから、フアロツピオはパドヴァのヴェサリウスの系統を引く高弟であるといえよう。

「解剖学観察」は古いラテン語で書かれ、読破するのは至難であるが、一九六四年にモデナから出た *Gabriella Righi* の *Pericledi Pietro* のイタリヤ語の解説と訳がある。

フアロツピオは、聴覚器の卵円窓、正円窓、蝸牛、半

規管、前庭階、鼓室階のかなり正確な記載、頭部顔面の筋や外側翼突筋の発見、咬筋の機能の分析、口蓋帆張筋と帆拳筋の記載、眼瞼拳筋、喉頭筋、大腿四頭筋の分析、卵管の発見、卵巣の成熟卵胞や黄体らしきものの記載、臭索、副神経、舌下神経の発見、滑車神経の支配筋の解明、三叉神経、内耳神経、舌咽神経、頸動脈、脳底動脈の優れた観察、顔面神経や鼓索神経とそれの通る骨の管（顔面神経管）の記載など、多岐にわたり詳細な知見を得ているという。かつて顔面神経管もフアロツピウス管と呼ばれた。

もう一つの大きい功績は、顕微鏡のない時代に、胃腸や膀胱の壁の三層構造、腎杯、骨化の状態などを見ていることである。組織学の起源は十九世紀の初めとされているが、その三百年も前の彼には「器官の構造」にまで関心をもつ見識と綿密さがあつたのである。

(大阪大学名誉教授・広島大学名誉教授・塩野義製薬中央研究所)